薩藩の考古学者　白尾国柱

池畑耕一

江戸時代の後半、薩摩藩主島津重豪のもとで活躍した国学者白尾国柱について、人類学者清野謙次は「幕末の薩摩考古家」と称した。(注1)

ところが地元では、というより考古学史の中ではこれまで考古学者として白尾をとらえたものは皆無に等しい。(注2)そこで、ここでは白尾の残した書物の中から考古学に関するものを紹介し、本県における考古学研究の開祖ともいえる白尾の業績を追ってみたい。

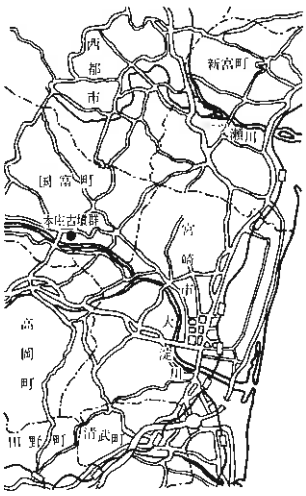
一、白尾国柱について

白尾は宝暦十二年（一七六二）八月五日、本田親昌の二男として鹿児島城下岩崎で生まれた。名は親白、親麿。通称は初め助之進、のち斎蔵といった。姓は藤原氏を名乗った。寛政二年（一七九〇）に槍術師範家白尾国倫の養嗣子となり、白尾国柱と改名、鼓川（鼓泉）、あるいは瑞楓と号した。そのため文武両道に優れ、大島流槍術を極めたという。

早くから国学の研究に着手したとみえ、三十一歳の時、つまり寛政四年に『神代山陵考』を著している。さらに寛政七年には『麗藩名勝考』、『南島考』を著した。そして寛政十一年には島津重豪の命により江戸藩邸に出仕、享和元年（一八〇一）には国史館に学んでいる。このころ本居宣長、塙保己一、村田春海、伏原宣条らに学び、文化元年（一八〇四）に『成形図説』（曽槃らと共同で編纂）、文化九年に『倭文麻環』、文化十一年に『神代三陵取調書』を著した。こうして文政二年（一八一九）に記録奉行、文政三年物頭に昇進したが、この頃すでに中風に侵されており、同年五月に鹿児島へ帰っている。そして翌文政四年（一八二一）二月十五日に六十歳で没し、南林寺墓地に葬られた。(注3)大正四年（一九一五）、従五位を追贈された。(注4)

二、本庄古墳群と白尾国柱

宮崎市の北西約十三キロメートルに本庄という街がある。大淀川の支流に当たる深年川の左岸台地上につくられた街で、地番は宮崎県東諸県郡国富町大字本庄である。この街には多くの古墳が存在し、大正二年にここを調査した鳥居龍蔵博士も「跡江より流に沿ふて溯れば、本庄なる一市街に達せん。此地は、殆ど古墳



位置図

群中に存在せり、と称するも敢て不可なき程にして、其古墳の無数なる驚くの外なし」といったほど密集した群をなしている。その数は高塚古墳五十四基、横穴約二十基、地下式横穴数基とされている。[注6] ここの古墳については古くからその存在が知られており、多くの書に書かれている。これについては斎藤忠氏が「学史から見た宮崎県考古学の側面」と題して、『宮崎県史研究』創刊号に詳しく書かれている。[注7]

ここでは、そのうちもっとも古い発見例であり、白尾の関係した寛政元年（一七八九）の剣塚調査を紹介しよう。

(一)玉里島津家資料

黎明館には島津久光を祖とする玉里島津家資料約一万二千点が寄託されているが、ここで紹介するのもその中の一点である。[注8]

これは『追加一七一　日向国諸縣郡本庄村古墳発掘品図解』と書かれた茶封筒に入れられた縦二十七・八センチメートル、長さ八百三十六センチメートルの和紙に書かれた文書である。この右の方、約百二十センチメートルには発見の経緯などの文が箇条書に書かれ、その左には出土品が色彩もいれて細かく描かれている。

まず、その文は「日州御料諸懸郡本庄六日町百姓川添弥右衛門農業之節古物に堀當り候一件」という書き出しで始まり、次のように続く。[注9]

一弥右衛門居宅より三町余南方、しやうせんし原畠の脇に高サ一間三四尺、廻り五六拾間計の丸岡有之、其竹木の根先畠江差入相障候ニ付、切除之ため且用水旁小溝堀通し置候、然處正月十九日朝右溝浚として弥右衛門差越、二尺計茂堀候得者一ツの穴に堀當り、則其内江入候處、長三間、横一間、深サ五六尺計の穴にて図の如く有之、最初は板にて拵たるものニも候哉、只今ニ而ハ都而上計ニ而右形之侭空所ニ相成有之候、且元来朱塗ニ而茂候哉、今以四方者朱相残居候、其空処之内に鎧二領、鏡大中小三面、剣三本、刀七本、袋鑓之ごとき鉾二ツ、矢の根ごときの品并曲玉、小玉類余多有之、弥右衛門持帰候得共其身百姓之事ゆへ何之思慮もなく、折柄土蔵修甫の砌にて右の品〻鍛冶の者江持越、右鉄を以釘を作度旨申ニまかせ槌に當候處、今の鍛冶の手ニ者及かたき堅鉄之由ニて其沙汰茂相止候

一本庄之来由者委難相知候得共、上古者御料を本庄并御庄と申たる之趣彼地通俗に申傳候

一六日町より十町餘を経て、高岡深年村之内上古伊東家支配之寺院有之、山伏面高善哉坊功によって高岡の地に属し、今以面高真寿院持来候其節之鐘も持傳来候、其鐘の銘に寛喜三年（至寛政元年八百年余）諸懸の御庄と有之候、中古ハ本庄六日町を高日村と申たる由申傳え候

一安徳天皇入水実者日州江御落居、本庄にて崩御之旨俗説に申来候、此説に就て堀出し候品者三種神器其外御譲の品と申觸候得共、其所寄無之候

一堀當り候場所より二町餘西に剱の墓稲荷之社有之、犬之塚とも申觸候、又犬之塚ハ剱之墓より東の方とも申候、何れ右之辺にて候、若安徳天皇陵を院の塚と申傳、又ハ犬の字に書違候哉、土民ともの事故文字に疎、院の字を犬之字に誤候哉、犬之字之音をとり剱之墓と申来候哉、先者院の塚、剱の墓両所之由、剱の墓は十握の剱を埋候場所、院の塚は陵与土俗に心得居候由

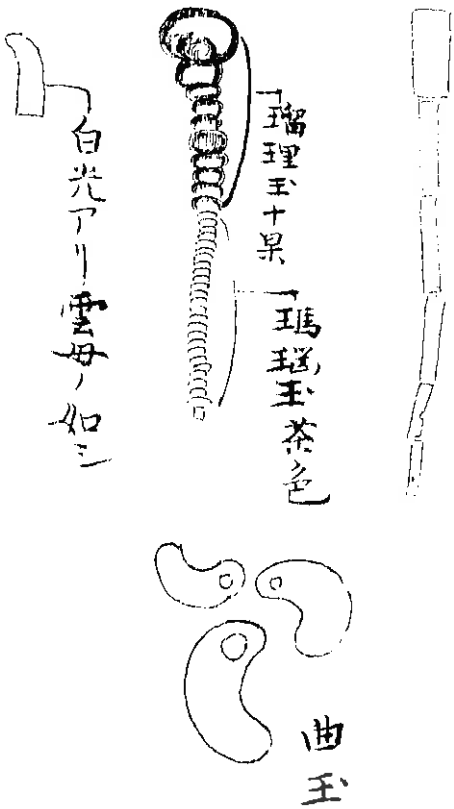
一堀當り候穴は段々詮議も候處、彼是之趣を以は寶櫃を其侭埋たるもの

と相見得候、然れとも奥歯の如きもの一有之たる由、然とはいへとも陵とハ相見得難く、寶櫃の説所寄近きか

右之外無所寄説は多く有之候得共略之、以上

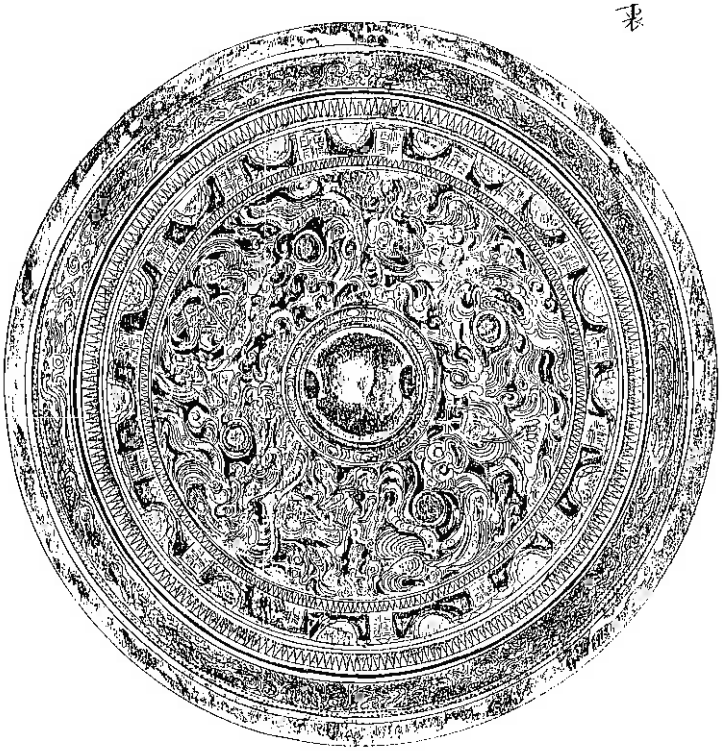
そして「日州御料諸懸郡本庄六日町百姓川添弥右衛門農業之節堀出し候古物　正写之図」と題し、図が描かれている。

まず管玉六点があり、これは鼡色のメノウ製と付記してある。左には小玉があり、ガラス製十点、茶色のメノウ製二十六点ある。その下には「白光アリ雲母ノ如シ」と説明された角状のものがある。そしてこの左に勾玉三点がある。



つづいて鏡三面が色彩を付けて紹介してある。色は緑・茶・青・黄などが使われている。

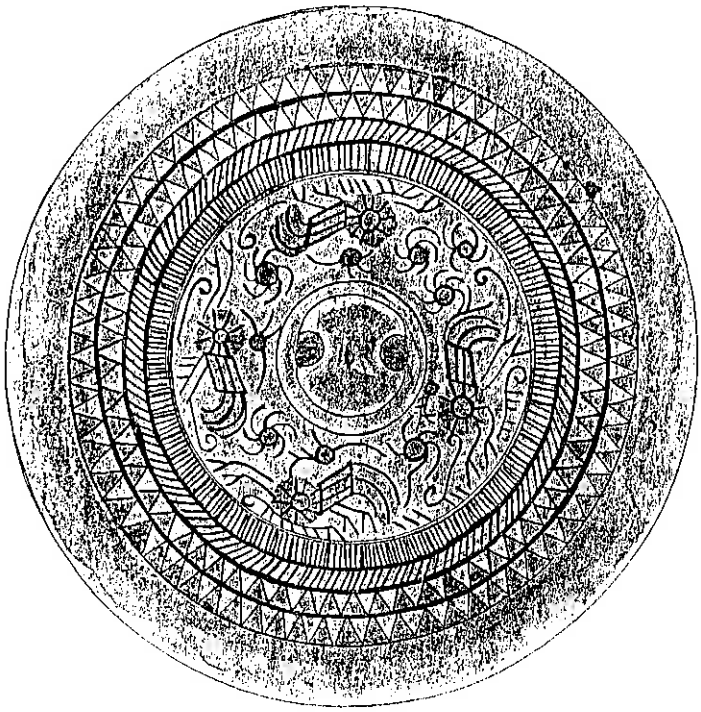
最初の鏡は「博古図曰漢三神鑑径五寸重一十両有半銘五十六字」と付記された画文帯四神四獣鏡である。つまり、直径が約十五センチメートル、重さが三百七十五グラムで、鈕のまわりに珠文と捩形を交互に配した鈕座がある。内区は四個の乳と六神四獣で構成されているが、神像は同一方向に頭部があり、天の部分に三神がいる。その外周には内外を鋸歯文で挟まれた半円と方形を交互においた半円方形帯がある。この方形



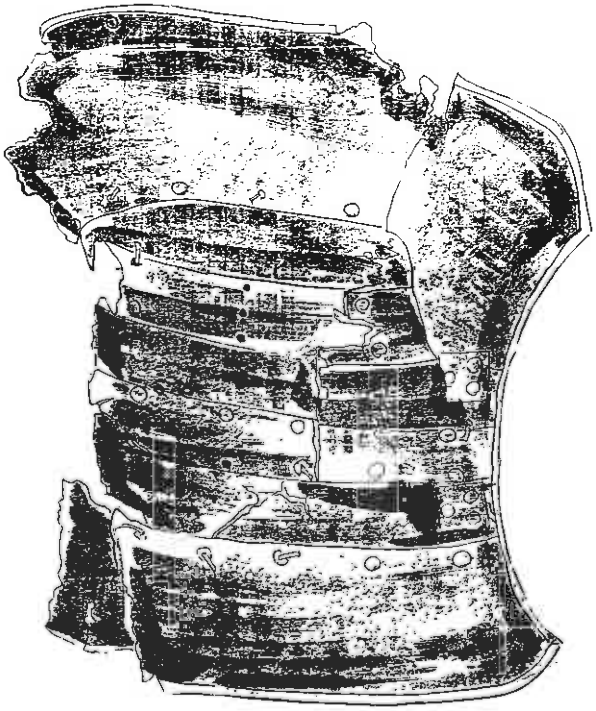
部に銘があるのだろうが、解読はできない。外区は獣文らしき文様が巡っている。

次の鏡は「博古図曰漢虎龍鑑径四寸一分重九両無銘」と付記された鏡である。つまり、直径が約十二・四センチメートル、重さが三百三十七・五グラムで、紐は三方に孔があいている。紐座は無文である。内区は四個の乳と、よくわからないが二神二獣だろうか。そのまわりに二重の櫛歯文が巡らされており、縁は平縁となるようで、ここにも櫛歯文らしき表現がしてある。

次は「四神鑑」とだけ付記された変形文鏡である。鈕のまわりに簡略化された四獣やわらび手文のようなものがみられる。そのまわりを櫛歯文、斜行櫛歯文、さらに内行鋸歯文が二重に巡っている。どこから外区か不明であるが、縁は平縁のようである。大きさもはっきりしないが、他の二面と比較してみると、十三～十四センチメートル位ではなかろうか。



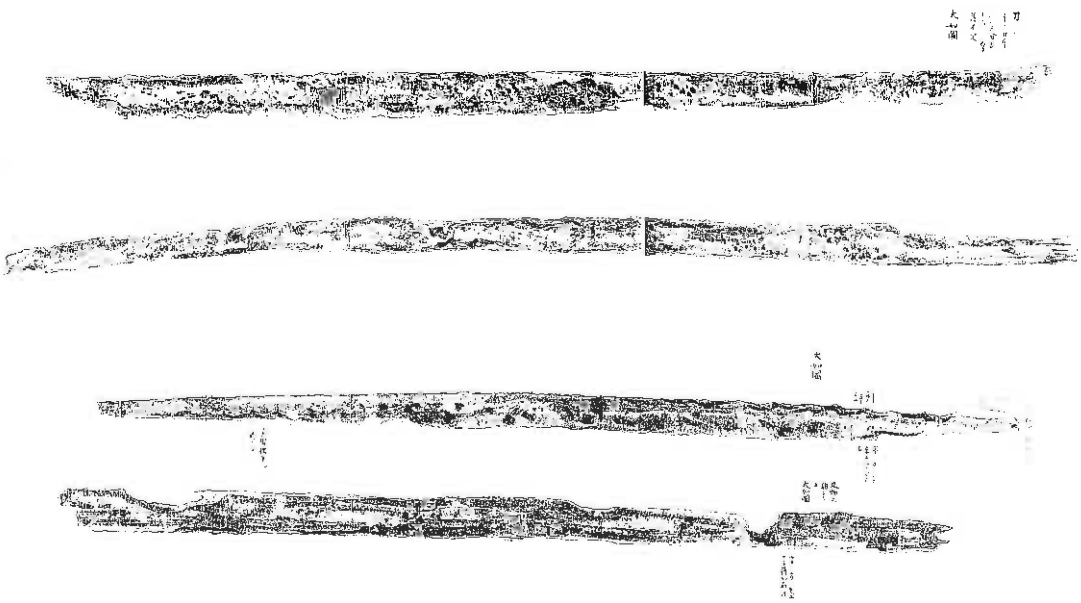
次いで「鎧ノ鉄札類之桿損シテ僅図ノ如残レリ大サ何レモ如図」と付記された鉄片数点がある。いずれも茶色が着色されている。そして「甲ノ半分桿残り大如図」とあり、さらに「皆鉄鋲ヲ以留鋲頭如図」と付記された小札鋲留冑、「如図」と書かれた馬具らしきもの、「鉄ノカタマリニテ甲冑ノ具トモ不見得」と書かれたものが続く。さらに短甲の図が五、小札の図が三ある。これは横矧板鋲留短甲で、もっともよく残って



いる破片（図）は八割ほどが残っており、高さが二十六センチメートル、幅が二十二センチメートルに描かれている。あと一点、大きい破片があることから、少なくとも二領の短甲が出土していたようである。

次には「刃物之桿残りタレハ何品共不分明　少シ凸ニテ両刃ノ如ク見ユ」とある刀剣がある。説明のように破損がひどく断面図がないために断定し難いが、説明からして剣のようであり、その長さは四十四センチメートルである。

そして「今之鏽ノ石突之如シ」とあり、左側に「壹寸計篦入有之」と記された矛先がある。長さ十一・五センチメートル、基部の直径二・五センチメートルある。



続いて「刀ナルヘシ　峯ノ方厚所ハ三分計モ有リ厚薄不定　大如図」とあって四本の刀がある。

最初の刀は、茎部分がなくなっているようであるが、残りは良く、長さが八十六センチメートル、幅が三・五センチメートルある。

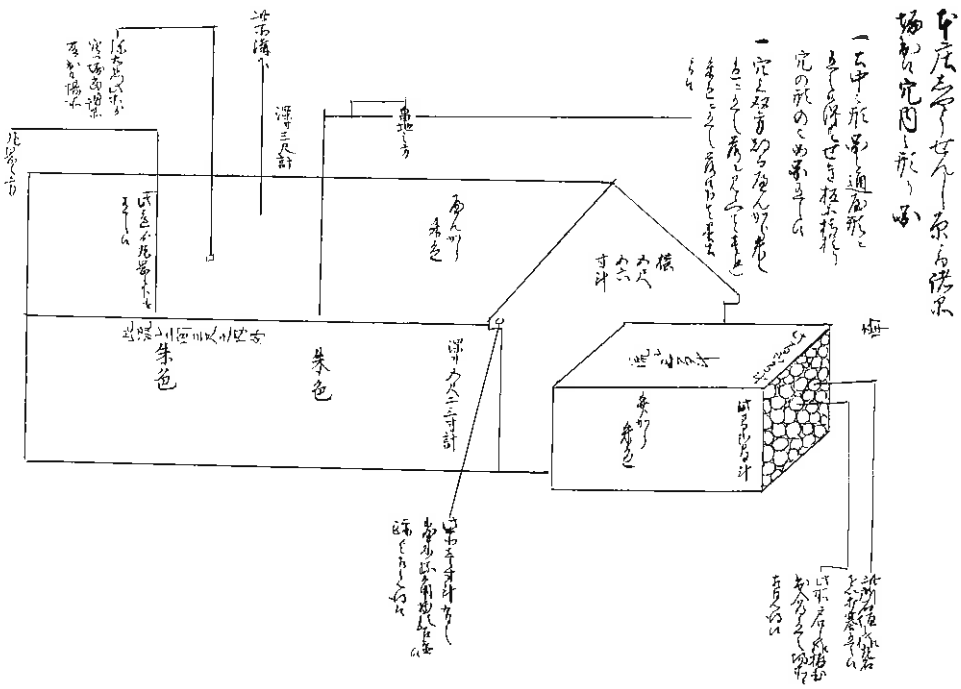
次の刀も茎の部分が欠けている。反った刀で長さが九十二センチメートル、幅が三センチメートルある。

三番目の刀はほぼ完形で、長さが七十六センチメートル、幅が二・五センチメートルある。茎の部分に「比間桿少シ鉄亦慥也」、刃のほうに「刃ノ方トミユ」、背の方に「峯ノ方トミユ厚キ所二分モ有ヘシ」「比間桿少シ前ニ同シ」と付記されている。茎に目釘穴らしきものが見える。

最後の刀は両側とも破損しており「刃物之類トミユ」と書かれている。背のほうに「峯ノ方ト見ユ厚薄如前件」と付記されており、長さが七十四センチメートル、幅が三・三センチメートルある。

そして最後に「本庄しやうせんし原ニ而諸品堀出候穴内之形リ図」「一、土中之形図之通屋形ニ有之候得共せき板等朽捨り穴の形のミ如図有之候　一、穴上双方都而へんから朱之色ニ有之落シ見候へ者壱通朱色ニ有之落候下者墨土ニ而候」という見出しで、地下式横穴の見取図が描かれている。この図は竪穴こそ描かれていないものの計測値、位置、方向、構造などを具体的に知ることができる優れた図である。

羨道部は長さが三間計（約五・四メートル）、幅・高さが二間計（約三・六センチメートル）あり、ベンガラで朱色に塗られていたようである。竪穴と羨道部とは丸石で石垣のように積んで閉塞されており、「此所戸口之様栫置出入為有之場所ニ相見得候」と解釈している。玄室には



妻入りで取り付いている。

玄室は長さが二間三尺内外（約四・五四メートル）、幅が五尺五六寸計（約一・六七メートル）、高さが五尺二三寸計（約一・五八メートル）ある長方形寄棟タイプで、全面ベンガラで朱色に塗られていたようである。そして柵の部分には「此所壱寸ばかり有之敷木など角物類召置候跡と相見得候」と付記している。そしてあちこちに、「溝下」とか「弥右衛門が品を取り出した所」、「丸岡の下」などと位置関係が記してあり、玄室の天井は地表から三尺計（約九十センチメートル）あるという。

このように、この文書は出土品を主体にしているが、要訳すると次のようになろう。

一、出土地は弥右衛門宅の三百三十メートル余り南にある高さ二・四メートル、周囲九十～百十メートルばかりの古墳の裾付近で、発見したのは一月十九日朝。

二、穴の大きさは長さ五・五メートル、幅一・八メートル、深さ一・五～一・八メートルで、四方は朱色をしている。

三、出土品は鎧二領、鏡三面、剣三本、刀七本、鉾二本、鉄鏃さらに勾玉三点、管玉六点、小玉三十六点などがある。

四、弥右衛門は土蔵を修理中だったため、出土した鉄製品を鍛冶屋へ持って行き釘を作ろうとしたが、堅すぎて出来なかった。

五、本庄という名の由来は、かつて御料を本庄・御庄と言っていたところからきている。

六、安徳天皇は日向本庄で死亡したといわれており、出土品に三種の神器などを含んでいるが、この両者は結びつかない。

七、出土地の二百二十メートル余り西に犬の塚ともいわれる剣の塚稲荷社がある。また、犬の塚は剣の塚より東の方ともいう。百姓は文字にうといから安徳天皇陵＝院の塚＝犬（イヌ）の塚＝剣（ケン）の塚となったのだろうか。

八、出土した穴はいろいろと考えたが、奥歯のようなものが出ているので断定はできないが、陵とは考えにくく宝櫃の可能性がある。

この文書には書いた年、人のみならず、古墳発見の年なども書かれていない。しかし、三段目で鐘の銘を説明する時に、寛喜三年は寛政元年より八百年余りさかのぼるというように書いていること、さらにあとで示す書物類から、この発見年が寛政元年であることがわかる。そして、これを書いた人物は、これに描かれた地下式横穴の図と、『日向国古墳備考』に描かれた図とが殆んどいっしょであること、鏡の調査に『博古図』を使っていること、さらには島津家資料の中にあったこと等から考えると、白尾国柱に間違いなかろう。

この文書は『日向国古墳備考』とあわせてみると、古墳の概要を詳細に書き述べた貴重な資料である。ことに、これまではっきりしなかった出土品を図とともにくわしく紹介した点では、報告書としても、とも優れたものといえよう。白尾は『麗藩名勝考』や『成形図説』など著書の多くに挿図を添えているが、特に『倭文麻環』は絵本といっていいほど優れた絵を添えている。(注10) この文書にある出土品の図も、白尾の描いたものであり、その配置等も忠実に描かれたものと思われる。寛政元年といえば白尾がまだ二十七歳の頃で、『博古図』を参考資料として使うなど若くして優れた歴史学者であったことがうかがえる。

(二)日向国古墳備考

これは巻尾に「藤原国柱書」とある冊子で、巻頭に「去歳寛政元年……」とあるから寛政二年に書かれたものである。十七葉から成る冊子である。[注11] その主要な点については、先の斎藤氏の論文にも書かれているが、その書き方、内容のくわしさなどは玉里島津家資料と異なっているので、簡単に内容を紹介しておこう。

序言に続いて、九条の箇条書になっている。

まず、発見のいきさつ等を記して、その位置図、地下式横穴の図が描いてある。この地下式横穴の図は、玉里島津家資料の図と殆んど同じであるが、付記の詳しさ、閉塞部の丸石の数など若干異なる所がある。

一、『日向風土記』・『古事記』の内容を紹介し、剣塚稲荷の性格づけをしている。剣塚稲荷は神武天皇の皇神、稲飯命の剣を埋めたところからきたのだろうと解釈している。

二、『古事記』に景行天皇の皇子のひとり、豊国別王は日向国造の祖で、母は日向の御刀姫だとある。豊国別王は日向諸県の君の祖とも記されているので、その母はこの剣塚の地名から名を取っているのではないかとしている。

三、この墓の年代を想定している。孝徳天皇の時に、棺にうるしを塗ること、玉・よろいなどを副葬すること等を禁じている。したがって、この埋葬された人は、その以前の人である。この墓室の形は畿内などの山陵とはだいぶ異なる。さらに、玉・鏡・鎧などを副葬される人となると稲飯命・豊国別王等より他には思いつかないといっている。

四、「本朝事始」・「軍器考」などの書物を利用して鉄製短甲の作り始め、その変遷、着用法などを詳細に記している。それによると、元来、よろいは鹿皮で作られていたが、そのうちに鉄製となった。鉄甲という文字の初見は光仁紀の宝亀十一年（七八〇）であるが、その前の応神紀に鉄製のものがあったことがうかがえる説話があり、その作り始めは古いと記している。昔は衣の中に着けたために衣中（ミソのウチ）とか、襖中（コロモのウチ）とも記してある。そして、出土した短甲について、これは一枚一枚の札を鋲止めし、その上を綿布・皮などで包んだものだろうと想定し、その大きさから昔の人は大きかったとしている。

五、「宣和博古図」を参考にして三面の鏡について考察している。三点とも紐を有しているから古い物であるとし、一点はその物とは異なるが漢代の四神鑑によく似ているとしている。応神天皇が百済王から大鏡をもらったという記事もあることから、昔は大陸から献ぜられたこともあっただろうといい、昔は鏡と玉は尊重され、天子授受にも宝鏡をもって「自分をいつも見るようにせよ」といったということから形見という言葉もできたという。この鏡の出土を「故ある伝授の物なり」としている。

六、次は玉類について考察している。昔は玉統（タマのミスマル）などの装束に着けて、王として身の飾りにしたが、孝徳天皇以後はその風習は知られていないとしている。南島・蝦夷などでは今もその伝統が残っているが、その作りは昔とは異なるという。陵墓に勾玉の出ることは「雲根志」にくわしく記され、勾玉については横井千秋「勾玉考」にあるから注意するようにと記している。そして勾玉は装束の結目のくくりにした親玉、児（小）玉の類は腕飾り、脚飾り等の飾玉だとしている。

七、刀剣について記している。古くは剣と刀の区別がなかった。この出土品も反りが少なく剣刀（ツルギタチ）と呼ぶにふさわしく、作りも古

い時代の様子を示しているという。

八、槍についても記している。すべて袋を有するもので、柄は残っていない。槍と矛はいっしょで、上世には保古といったとし、「日本紀」には「槍」の字を用いているという。

九、そして、蟬羽のようなもの、上古に比礼（ヒレ）といったというものを紹介している。手に乗せ暖かくすればムシムシと動めくといい、その用い方は「古事」・「旧事」等に見えるとしている。

十、最後に、墓の被葬者について記している。昔は文武両道に優れた人はなく、武に優れた人が天下を治めていた。ここの被葬者も甲冑・槍の類が多くあることから古武臣の塚だといえるとしている。

以上のような内容を書くにあたり、白尾は多くの図書を綿密に調べて要所にそれを利用している。ここに利用された図書は「古事記」・「日本書紀」・「続日本紀」・「日向風土記」はいうに及ばず、「本朝事始」・「軍器考」・「高館草紙」・「湧幢小品」・「綿襖甲冑考」・「何氏兵録」・「平壌録」・「隋書」・「姓氏録」・「補正標疑」・「宣和博古図」・「雲根志」・「勾玉考」・「増鏡」・「延喜式」・「令義解」・「三代実録」・「旧事記」・「西遊記」など国内外の広い範囲に及んでいる。これは白尾個人の力量のみならず、当時の薩摩藩における国学への強い関心、特に島津重豪の強いあと押しがあったことも無視できない。とはいえ、若くしてこれだけの図書に精通していた白尾の力量はすでに藩内では秀でたものであっただろう。さらに、彼は畿内での古墳調査、南の奄美・沖縄の風俗等と比較して、その性格づけにあたっているが、このことは既にこの時、このあたりの調査にあたっていた可能性もある。

その結果、現在ほどのこまかい分析はできていないまでも、それほど誤りのない解釈ができている。すなわち、その時期を「孝徳天皇以前（七世紀中頃以前）」としていること、鏡・玉・甲冑などの出土から被葬者を「高貴な人」だとしていること、こうした形態の墓は近畿地方のものとはだいぶ異なっており「地域性の強い墓」としていること等である。個々の出土品の解釈にしても広い視点でとらえているために、より詳しい。ただ蟬羽のようなものというものは、文章からも図でも解釈できない。

(三)その後のゆくえ

この資料については、その後も幾人かの人によって紹介されている。

島津侯の招きで藩内を歩いたこともある佐藤成裕（江戸生まれ）は文政九年（一八二六）に『中陵漫筆』を成しているが、これにその際、当地の人達から聞いた話を紹介している。これでは出土品のうち剣は二、太刀は八となっており、さらに壺一個もあったとし、これらは薩州侯に献じたとしている。

江戸生まれの桂川中良は、寛政十二年（一八〇〇）に『桂林漫録』（上・下）を著し、（下）には主として甲冑について紹介しているが、この中に本庄出土の甲冑について説明と図を載せている。冑も短甲も玉里島津家資料の図と同じである。この出土品について、これらはすべて何某侯（島津侯のこと）の秘蔵となっていたのを、寛政七年（一七九五）に堀素山の亭にてくわしく調査したとある。(注12)

このように、これらの出土品は島津家に献ぜられたようであるが、現在その所在については不明となっており、(注13)白尾らによって紹介されたこ

れらの図などが唯一の手がかりとなる。

三、端陵古墳と白尾国柱

本県には神代の陵といわれるものが三ケ所にある。『延喜式(諸陵寮)』にある神代三代の陵墓、埃山陵・吾平山上陵・高屋山上陵の三上陵である。この山陵について、もっとも古く本格的に取組んだのが白尾国柱であった。白尾は先に記したように寛政四年に『神代山陵考』を著しその解明に努めている。

江戸時代には大きく分けると二回にわたって山陵調査の流行した時期がある。(注14) 第一回目は十八世紀後半から十九世紀前半、本居宣長・蒲生君平・伴信友らによってなされ、蒲生の『山陵志』などはその代表的文献である。やがて、十九世紀中頃から後半になると、勤王思想の高まりとともに陵墓への関心はいやがうえにも高まってきた。宇都宮藩による山陵修補、「文久の修陵」もこの頃であり、谷森善臣・北浦定政などの研究者が生まれた。白尾の『神代山陵考』は第一回目の初期にあたり、彼の調査は蒲生や伴などに大きな影響を与えている。

ところで、周知のように現在いわれている三山陵の比定地は明治七年(一八七四)七月十日に決定されたものである。それまで各地に比定候補地があったなかで最終的に現在の地が決められているが、この時に高屋山上陵は突然、肝属郡内之浦町から姶良郡溝辺町へ移っている。このあたりについてはその理由がはっきりしないが、中村明蔵氏が『隼人文化』第9号で(注15)変遷について触れている。同じように可愛山陵についてもそれまでと異なる地点が比定されている。

ここでは、白尾が可愛山陵をどのように考えていたかを『神代山陵考』・『麑藩名勝考』・『神代三陵取調書』を通して見、特にその考古学的視点を探ってみたい。

(一)神代山陵考

この書は「薩摩麑府　白尾齋蔵國柱緝」で始まり、最後に「寛政四年壬子夏五月二十三日藤原國柱艸鼓川亭」と記して終っている。(注16) 内容は大きく可愛山陵(エノミササキ)、高屋山陵(タカヤノミササキ)、吾平山陵(アイラノミササキ)そして付記の四節に分かれているがその半分が前三節、残り半分が付記に費やされている。付記は彦火火出見尊に関して海幸・山幸神話に触れ、沖縄・奄美など南島について詳しく記している。この中で、『南島志』という本があるが、まだその序説を見ただけで全部を見ていない。そのうちに、これを見て南島について考えてみたいと記している。これは、その三年後に書かれた『南島考』のもとになったものだろう。

ところで高屋山陵は肝属郡内浦郷北方村高屋山の巓(現在、内之浦町北方)に比定し、これが日本書紀でいう日向高屋山上陵(彦火火出見尊(ヒコホホデミノミコト)の墓)であるとしている。吾平山陵は肝属郡姶良郷上名村(現在、吾平町上名)の巌の中に比定し、これが日本書紀にいう日向吾平の山上陵(彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊の墓)だとしている。

可愛山陵については三山陵の中でも、もっともくわしく書かれている。ここで、それを簡単に紹介してみよう。

薩摩国高城郡水引郷五台村中山の巓(たき)に在り。日本書紀に曰く「アマツヒコヒコホノニニギノミコト崩す。よって日向の可愛の山陵に葬る」。天書に曰く「ニニギノミコト、時にヒコホホデミノミコト出誕し、よろしく

これに譲るべきなり。次に子を生み、ついに崩す。筑紫日向縁の中山の巓の陵に葬る。すなわち、これなり。」

今、中山陵の右に新田廟あり。可愛の山陵、また川合の陵、端の陵の三陵あり。川合の陵は中山陵の左にあり。端の陵は中山陵の右にあり。今、俗にこの三陵をもって、一は天照大神の陵、一はアメノオシホミミノミコトの陵というは皆非なり。古は帝皇の葬らるる所、あるいは三陵を営む。一は、聖体を蔵し、他はその轜車と服御、凡百の葬具を蔵す。三墓をあわせて、某帝皇の山陵となす。

しからば即、今この三陵はもとよりこれ同じ瓊尊の陵なるのみ。可愛の中山陵、可愛の端陵、可愛の川合陵と称すべきものにして、俗にこれを中陵、端陵、川合陵というは、その地名を省略せるなり。かつ、新田廟は後世の建る所にして太古の制に非ず。今、その廟山を名づけて神亀山といい、あるいは亀山という。山の形をかたどり、しこうして今その廟域は、すなわち、これ尊宮城の墟なり。

古くはすべて可愛と称す。可愛あるいは縁、埃に作る。

神代巻の註にいわく。可愛の陵は大阜山のごとく、霊気はなはだ盛んなり。人敢て近づくことを得ず。今、中山陵、および端陵ならびて大阜にして、いわゆる山のごとく、陵のごとし。而して、川合の陵は中山の陵を距ること一里ばかり。その地は卑湿狭隘にして、もって玉体を蔵すべき所に非ず。これ、そのいわゆる服御物を蔵したる陵なるのみ。

日本紀に曰く。可愛の陵に葬る。天書はすなわち周復詳明の言を加え、もって縁の中山の巓陵といふ。もって、中山の陵の真蹟たるものを證するに足るなり。今、すなわち中山の陵の巓に磐石ふたつを安んず。なお壙礎（筆者注・石棺の蓋のこと）の如し。（周囲に井韓を以てし、世々命じてこれを修す。その石、最大なるは俗にいう片石のごとし。神功に非ずんば山上に運ぶことあたはず。他の二陵はすなわちこれ無し。）

以上、中山陵付近の記述について抜書したが、このあと、この章は高千穂宮、吾田の長屋笠沙の崎などについてまで広い視野のもとに記述している。

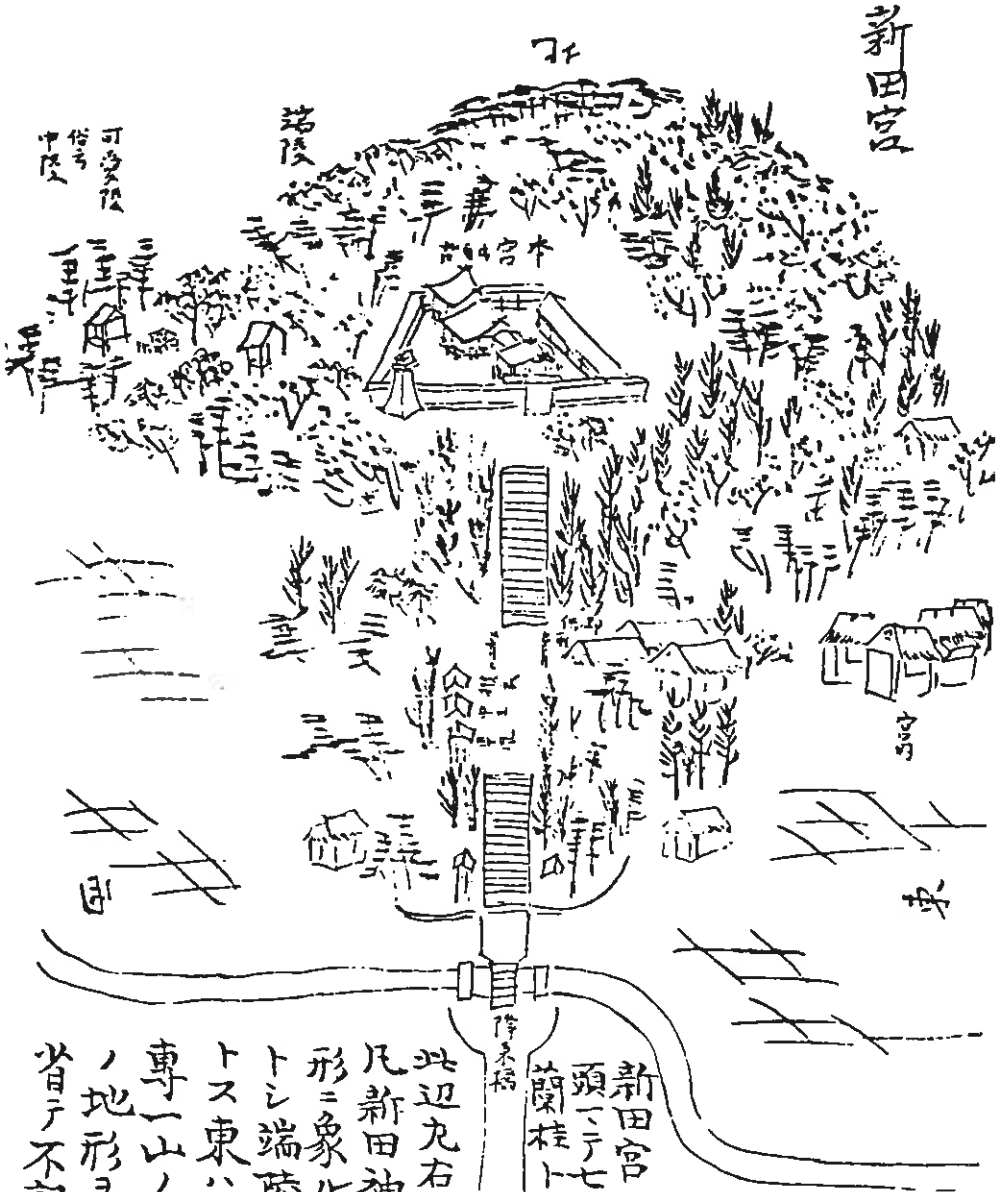
(二)麗藩名勝考

白尾は、さらに三年後の寛政七年秋八月十五日に『麗藩名勝考』を書き著した。[注17]「白尾斎蔵識」と署名しているこの本は、藩の古跡・名勝の由来や伝承などをくわしく調べあげたもので、のちの『薩藩名勝考』や『三国名勝図会』の先駆をなすものである。これは八巻からなっており、薩摩国四巻、大隅国三巻、日向国一巻である。可愛山陵は、そのうちの巻二にあり、新田宮とは別項目にある。

白尾は、この本を書くにあたり、その自序に「壬子の春、余かつて三陵考を起草し、以て同志につぐ、ねがわくは、之をしてその訛謬を知らしめ、万分の一端を後葉に伝えしむる也」と書き、神代三陵についての誤伝説を修正しようという意図をもっていたようである。

可愛山陵は『神代山陵考』とは異なり、エノヤマノミササギとふり仮名をふっている。次にまた、その要所要所を紹介してみよう。

書紀・延喜式は埃、濱成天書は縁に作る。書紀に曰く。「久しくありてアマツヒコヒコホノニニギノミコト崩れ、よって筑紫日向可愛の山陵に葬る。」天書に曰く「筑紫日迎縁の中山の嶺陵に葬る。」諸陵式に曰く「日向埃山陵、アマツヒコヒコホノニニギノミコト、日向国にありて陵



亀山ノ周回凡一里三合
今俗ニ可愛陵ト云自是西ヲ町餘ニ在リ爰ニ其園ヲ畧
新田宮坂ノ下ヨリ仁王門下渡頭ニテ七町廿二間餘ノ路ヲ蘭桂ト称ス
此辺凡右共ニ新田神人屋鋪
凡新田神山ヲ亀山ト称ス形ニ象ル也西方中陵ヲ首トシ端陵ヲ頸トシ本宮ヲ胴トス東ハ即尾ナリ○此圖ハ専一山ノ大様ト可愛陵トノ地形ヲ見ル為ニ瑣細皆省テ不記事ハ本條ニ詳也

麗藩名勝考より

此圍ハ中陵端陵ヲ別ニ引離シテ見ル為ニ地取也中陵ニ井垣アリテ中ニ石数片ヲ置ク玉體ヲ藏シ所トソ端陵等ニハ無シ

麗藩名勝考より

戸無し」

国柱謹しんで按ずるに、今地形に拠り、其実を考ふればすなわち今新田宮のある所。すなわちこれ、皇孫玉体を蔵せらる所か。しかるに天書の記する所、けだし詳覈を得るなり。今、土人中陵と称するは自然山陵にして山巓に磐石数片を置く。蓋壙礎。その下に石槨ありという。（石槨もとより地中に在り。見るべからず。かつてこれを権執印祐清に聞くに曰く。昔、陵上に松が四株あり。多く年を経た所、枯れ朽ちた。よってこれを取除く。土人その根を掘り、薪とする者あり。堀すでに深く、しこうしてひとつの石槨が見えた。蓋の大きさ一丈余り。その大きさ神功に非ずば、すなわち山上に運ぶことはできない。土人は恐れ、すなわち松根を掘る。時に祐清また自らこれを見たという。）しかるに、天書にいうところの中山巓とはまさにこれか。今に至って中陵と称す者、いよいよもって信ずべしか。しこうして、別にある端陵・川合陵と称すは、ついに後世紛紜して適する所なし。故にひそかに見聞する所を書し、もって他日の考證に備ふること左の如し。

十二ページの図では新田宮と可愛陵との位置関係を示している。十三ページの図は可愛陵（俗にいう中陵）と端陵との位置関係が示されているが、これは十二ページの図と位置関係は同じである。

そして、次のように続く。

しかれども可愛陵と申すは、すなわち亀山の事にて、今も御山と称ふるは古言のままいい伝えしとぞ見えたる。さらは、この一山はこれニニギノミコト都したまうの遺墟にして、中陵はのちに玉体を葬りし所、これをあわせて可愛山陵と申せしにはあらしか。今、中陵の山は亀の頭という

に当り、かつ山頭に磐石を置いて、方丈余りの井垣を巡らし、また、その下には石槨ありというにて、天書に縁の中山の嶺陵とあるに符合せり。

そもそも中陵というは、新田宮より戌亥の方三町二十間余りに在りて、亀山の頭とする所也。また、新田宮とこの中陵との間にひとつの山岡ありて、上に小祠を立らる。土人は端陵という。しかれども、上に井垣もなく、壙域らしきものもなければ山陵とも見えず。（土人あるいは、これを天照大神の山陵ともいい、また誤って中陵とも唱ふるは誤まりなり。中陵は前の亀山の頭に当る地にて、それより西に川合陵あり。さて東に端陵ありて、中とは川合と端陵との中に在るをもっていう名なり。また天照大神はつねに天上にあって、地下に降りたまわざるはいうにも及ばず。書紀・古事記その他の正史実録に、崩御のさたさえなきを、何とてその御陵の有べきぞ。）しかれども、この端陵というも、若くは皇孫の国母栲幡千々姫命を葬りたまわりし所なとにや。八幡という宮号の縁と、土人端陵を天照大神など申すによれば、その縁故なきにあらず。

先の『神代山陵考』に比べて、これは考古学的記述がくわしい。すなわち、①中陵の山頂には磐石数枚があり、その下には石槨がある。②蓋の大きさは方一丈余りある。③この大きさからして神業でなければ山上には運べない。この三点については以後の書物についても、ずっと書かれている。

(三)神代三陵取調書

さらに十二年後の文化十一年十一月に「重豪公の命により白尾国柱三陵取調書写」で始まる『神代三陵取調書』を著した。(注18) この時の肩書は御記録方添役となっている。

内容は、まず文献にある可愛山陵の紹介に始まり、次いで新田神社の意味・変遷、中之御陵・端之御陵・川合之御陵の紹介があり、最後に山陵の意義づけで結んでいる。ここでは考古学的記述のある中之御陵、端之御陵等についてのみ、その要所を紹介しよう。

中之御陵と申す所は新田廟より三町西方、山続きにて端之御陵よりは東に当たり、山上に小社一宇相立居、その中には神鏡一面を納め有之候。しかれども、年代久遠に及び候や、すでに破損致し、全体しかと分かりかね候。小社の四隅には古松四本あり。この一本はさる文化三年の頃、枯木に成り候ゆえ、伐除之れ有ゆえ、根を掘取り候節、石の槨に掘当たり。その節、権執印淳青たいてい見分仕り候処、石槨の体は平長く、真四角には之なし。その槨中に今ひとつの石棺之れ有様子見受申候。かつ、最初石槨を掘取り候者、蓋石を引披き候えば、中より煙のように白気吹き出し、その蓋石の裏は青赤き色に相見え候由、左候て中・端の両御陵ともに、元来、自然の山上に葬り奉る。その上より土を築き立申たる様子にて、山の頂は急に高く、その下は一段の平なる所あり。当分は参詣仕り候者は直に御陵の上に踏上り申す事にて、はなはだ不敬成る方にござ候。もっとも両御陵ともに山上小社の側を叩き候えば、その地下は空虚の響きいたし、山上はすべて御石槨にてもござ候半。之れに依り社家郷役とも吟味仕候は御陵の頂には石囲垣にても之れ無候ては御粗末の体ござ候。しかれども、先年石槨掘当り候所は、当分の小社よりよほどの片脇に候えば、御石槨あり候方限、何より何までと申す儀、当分にては相わからず候。しからば、当七月大風に御陵上の松の木吹き倒れ、入札払伐り除方仕り、右の根先をも掘取り申すはず候につき、その節に至り、ご石槨の方限たいていは相知れ申べきやといずれも存じ奉り候。

端の御陵と申す所、実は三御陵の中央に当り候えども、新田宮社家にてはこれを端（はし）と相唱。それより東、新田宮の方、山続きを前条中之御陵と唱え来候。この端之御陵は山上に石数片を安置し、その回りを木の囲垣をもって相囲み、西の片脇に小社一宇相立居。内には神鏡一面を納めあり候えども、これまた破損致し、全体しかとわかりかね候。（中略）この端の御陵には伏石の回りには木囲垣あり、その傍に小社相立居候えども、これまた御石槨は囲垣よりも外に広く相掛居申す様子にござ候。

さて可愛の山陵、すなわちニニギノミコトの御陵の比定については、この三陵のうちのひとつであろうとしているが、明白にすることはできないとしている。ただ中の陵と端の陵は石槨があることから可能性が強いことを示唆している。さらに、上古は天皇の御陵という所の近辺に御陪葬として御后が葬られている。したがって、三陵のうちの一ケ所はニニギノミコトの皇后コノハナサクヤヒメの命の御陵で、新田宮では御前様と申し伝えているとしている。

先に『神代山陵考』・『麑藩名勝考』を紹介したが、これらの記述と本書の記述には大きな違いがある。

まず中陵と、端陵の位置関係である。亀山の頭の部分に当たる陵を前二書は中陵としているのに対して、本書では端陵としている。

次に可愛山陵の比定についてである。『神代山陵考』では三陵とも頭に「可愛の」という字が付くとし、可愛山陵というのは三陵あわせて呼ぶのだとしている。ところが、『麑藩名勝考』では中陵を可愛山陵に比定している。しかし、本書では端陵か中陵の可能性が強いとしながらも

具体的に指していない。

最初に中陵と端陵との入替えがあったと記したが、これによって内容的なものが混同している。本書による中陵は『麑藩名勝考』では端陵となっており、石槨などは無いように記してあるが、本書では中陵・端陵ともに石槨があるように記してある。そして、前書と本書の間で、両陵が入替っているにもかかわらず、両書とも中陵についての記述はほぼ同じであり、どちらかが間違っていることになる。このことについては、またあとで記したい。

ところで、この書でも白尾の博識がうかがえる。彼は近畿地方の古墳調査もやっていたようで、天皇陵などには陪陵があること、神武天皇陵などの御陵も乱世の時代に、その周湟などを田に開いたということを記している。相変わらず多くの書物を参考としており、『山陵志』・『廟陵記』・『塩土伝』などの名が出てくる。

白尾の山陵に関する記録はこれで終わる。ところが白尾は他の人々の山陵に関する書物にも色々と協力している。例えば、天保三年（一八三二）の『山陵記』（伴信友）第二冊には薩摩大隅神代陵図があるが、この図は文政三年、すなわち没する一年前に白尾が依頼されて提供したものである。信友はこの本に、白尾が日向大隅薩摩の国々を行巡って古老に聞き、山陵の所在を正し、図と案とを携えて君侯に奉った由を記している。[注19]

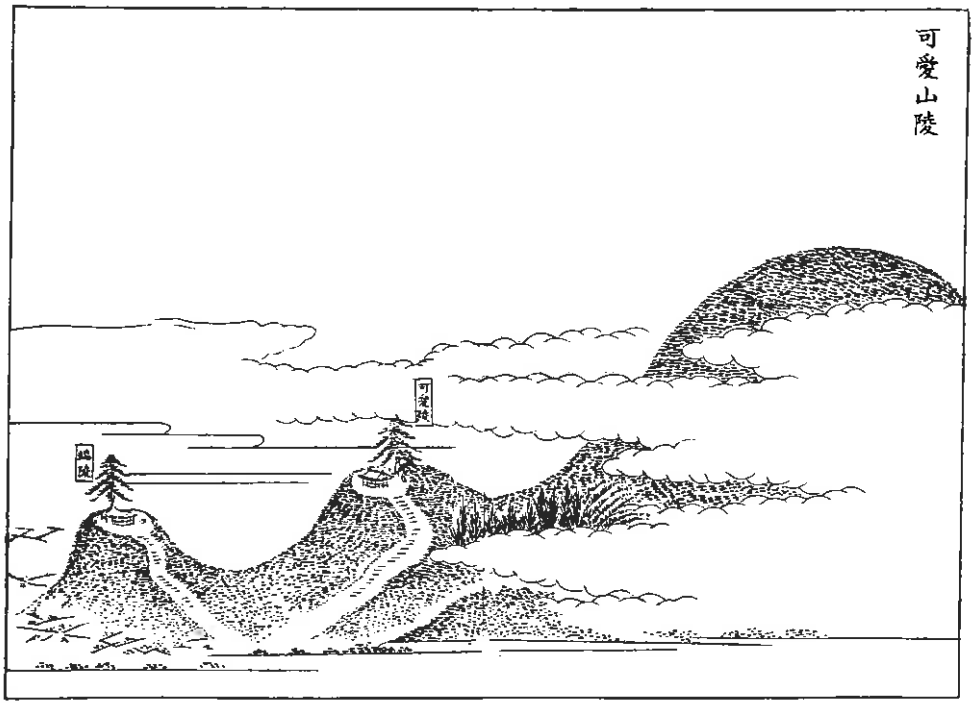
㈣その後の端陵

このあと端陵については後醍院真柱が文政十年（一八二七）に『神代三陵志』で、橋口兼柄が天保十四年（一八四三）に『三国名勝図会』で、樺山資雄が明治七年（一八七四）に『神代三陵異考』で触れているほかに山之内時習、高木秀明らも調査している。

後醍院は、[注20]「かくて此地に古き御陵と云伝えたるが三所あり。そのひとつは新田宮より西の方一町余りにして小高き山なるが、今これを中の陵という。それに続いて半町ばかり西の方に当りて中の陵と同じ形の山なむそのひとつにはありける。これを端陵という。」とし、「社人の説に中の陵は天照大神、端の陵は忍穂耳尊とも栲幡千千姫命といふは論ふに足らぬ妄説なり」と解している。そして「中の陵という所、文化三年の事なりとか、松の大木の枯れたるがありて、土人これを薪にせむがため、宮に申し乞て伐取り、なお根をも採らむとして五、六尺ばかり掘りし時、底に大きなる石構状現われしかば、人々いと畏みて速かに本のごと埋め置きしとその時見たりし人の語りき。その真の御陵は上に云える八幡山なること決し」と続け、白尾の考えを強く否定し、可愛山陵を現在指定されている八幡山に比定した。

橋口は巻之十四高城郡の中で可愛山陵を書いている。[注21]ここでは「土俗に可愛山陵を呼て中陵という。」「中陵は、新田宮と、端陵との、中間にあり、中陵とは、其中間にあるを以て名を得たり」とし、『神代三陵取調書』の説と同じ説をとっている。さらに石槨の存在なども『神代三陵取調書』を引用している。ただ、白尾ははっきりいわなかった可愛陵、すなわちニニギノミコトの御陵を中陵に、コノハナサクヤヒメ命の御陵を端陵に当てており、図を書いている。

樺山は[注22]「新田神宮より戌亥の方三町二十間余に中陵と称する小社あり。又新田宮と中陵との間に一山ありて山上に小社あり。里人端陵と云ふ。共に山の高さ十間許にて可愛山の支山なり」「中陵も尊の御陵には非ず。」



三国名勝図会より

として、新田宮すなわち可愛山説をとっている。さらに『麗藩名勝考』を引用して「端の陵もその形状、中の陵に異ることなければ石槨も等しからむは地を穿たずして知られたるを、たまたま現れしについて石槨は中陵のみと思えるは深く考えざるなり。(中略)白尾氏が説の中に引かれし天書は偽妄の書にして、とかく云ふにも足らぬ書なるを此陵の事を縁の中山の巓陵としも云える実の事蹟によく符えるは甚も奇しき事なる」と続け、さらに「国柱が中陵なりと云ひしは、かえすがえすもいぶかしくなむ」として強く可愛山陵が中陵とする説を否定している。この樺山の書いた明治七年五月十七日は三山陵が決定される約二ケ月前のことで、彼は同時に高屋山陵の内之浦説も強く否定している。ただ、樺山は『神代三陵取調書』や『神代三陵志』については触れていない。

こうして可愛山陵は、昭和七年七月十日に現在の位置に指定され、白尾の説は無視されてきた。いっぽう、第二次世界大戦後の神話教育の軽視化は、これら神代三山陵を無視する方向へと向かい、同時に中陵・端陵も返りみられることは少なくなってきた。(注23)

筆者も長い間、現在の三山陵が古墳と無関係であるために、他の考古学研究者と同じく軽視してきたが、白尾の『麗藩名勝考』を見る機会を得て端陵・中陵の精査を考えた。第一回目は川内市歴史資料館の中島哲郎氏・長谷川順一氏とともに、昭和六十一年七月四日に現地踏査をした。その時は端陵・中陵ともに墳裾の確認ができ、特に端陵は、その高さが高いことから墳丘測量の実施を計画した。そして、昭和六十二年八月十九日に測量を開始した。(注24)

(五)端陵古墳

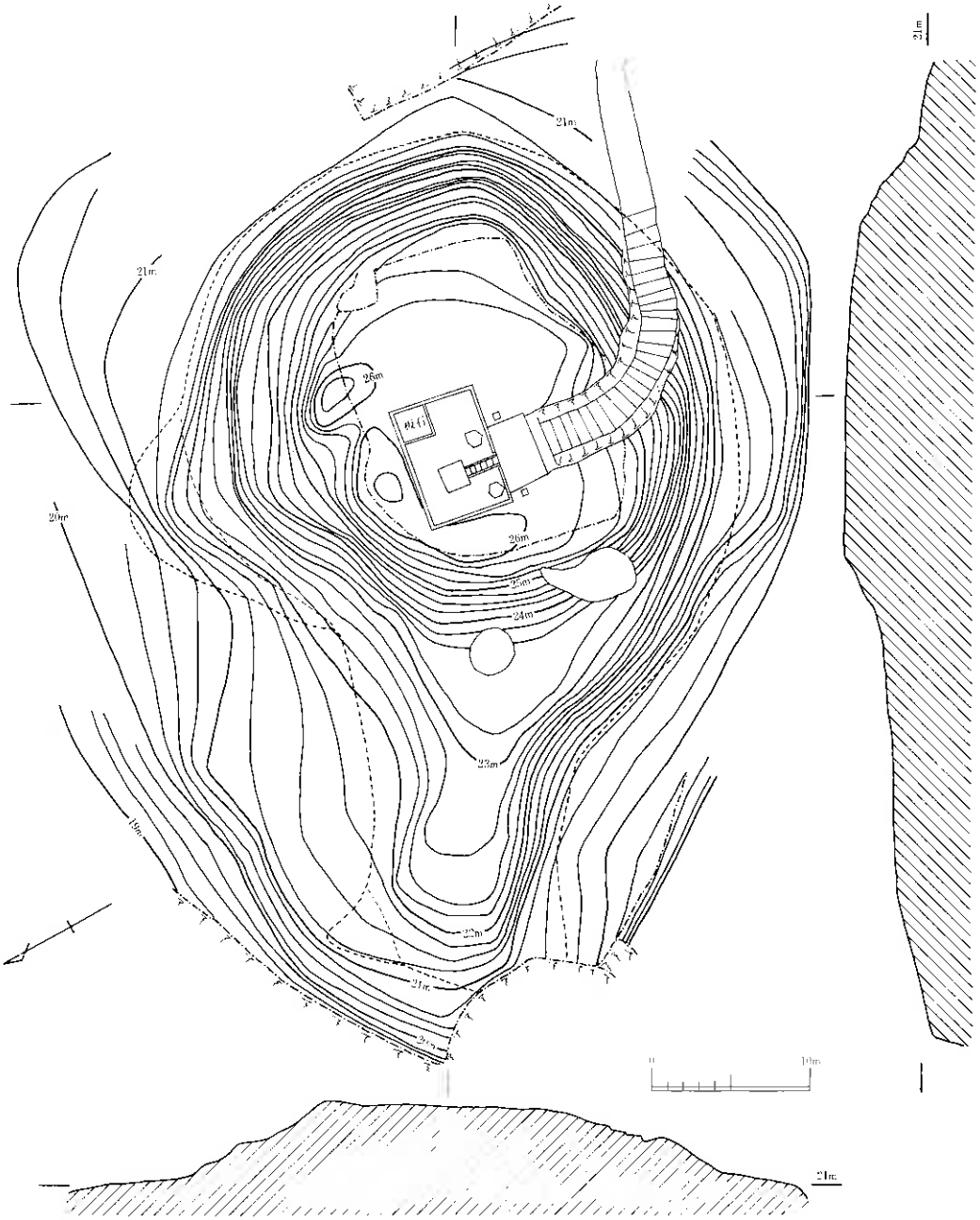
端陵古墳は川内市宮内町にあり、中陵とともに現在は新田神社の管理下にある。北・西・南の三方向が低地から強い傾斜で立ち上がった標高約二十六メートルの独立丘陵状を呈するが、東側は低地よりはやや高い谷部を経て、中陵、可愛山陵へと続いている。その頂部は十五メートル×二十メートルの平坦部が形成され、そこに五・五メートル×八メートルの方形を呈する石囲いが造られている。この平坦部はすでに『神代山陵考』にも記されている所であり、その削平事業は寛政四年（一七九二）以前に行われたようである。しかし、当時は囲いは石でなく、木であり、石へ変わったのは文化十三年だったようである。この石囲いの北東隅に二メートル四方の区画が、さらに石で囲われており、ここに板状石数枚が置かれている。これが『神代山陵考』などで片石（へげいし）・磐石、また鳥居龍蔵が甲式石棺と呼んだものである。石囲いの中央にはほこらが建てられ、その両側には石燈ろうがある。これは文化十三年（一八一六）二月に建立されたもので、中陵の石燈ろうも同年に建立されている。この平坦部へは下から階段が取り付けられており、その入口には鳥居がある。

亀山遠景（左端山頂が端陵古墳）

墳丘は、この丘陵の頂部を利用し、丘陵端つまり西側に前方部がある前方後円墳である。主軸方位はN六十度Wである。現在、前方部端の南側はくずれて絶壁になって落ちており、やや墳形を損なっているが、そ

端陵古墳頂部

れ以外はよく残っている。ただ後円部の北側からくびれ部にかけては、頂部平坦化の際、廃土場所となったためか墳丘裾が広がっている。前方部は端部に向かって曲線を描いてバチ状に広がっており、長さ二十一メートル、くびれ部の幅が二十メートル、末端の幅が推定十六メートル（現在十メートル）である。高さはくびれ部付近で二・五メートル、端部で二メートルある。後円部は直径が三十五メートル、高さが四・五メートルある。この山はシラス台地となっているが、墳丘自体もシラスのようである。

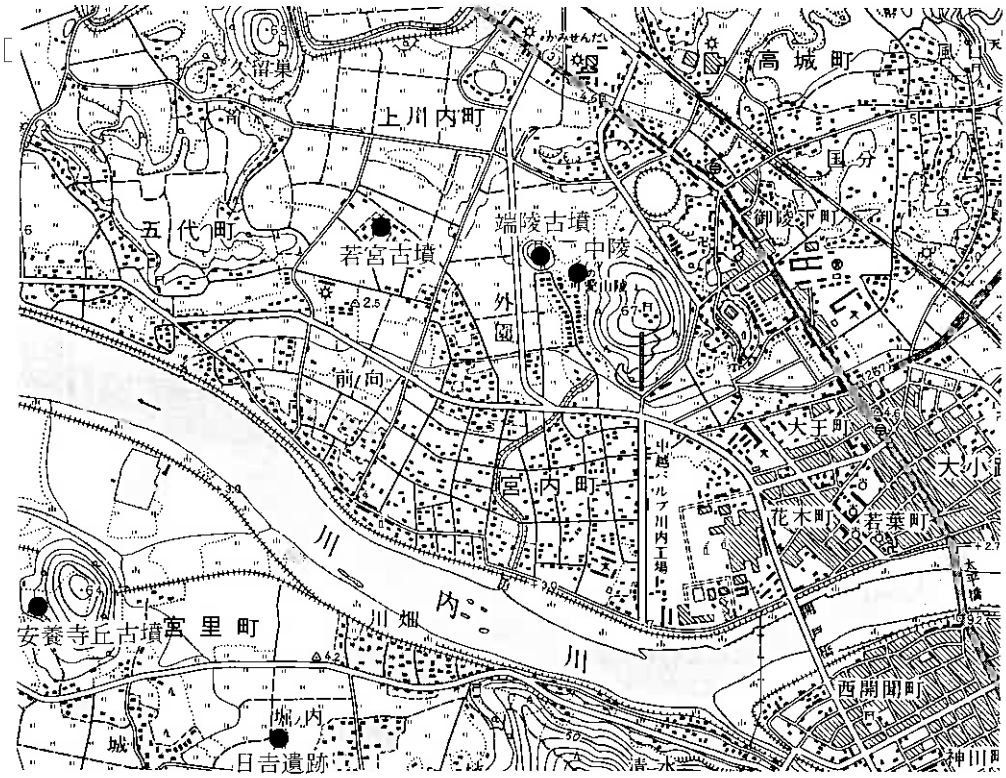


端陵古墳測量図

端陵古墳頂部の板石

いっぽう、中陵は測量を実施していないために、はっきりしないが、略測によると直径約二十二メートルの円墳のようである。

このふたつの古墳は規模も川内川下流域では最大であり、出土品が不明なために年代を確定することはできないが、端陵古墳の年代は墳形からして下っても五世紀前半、あるいは四世紀代に上る可能性もある。それは白尾が記した石室の中に石棺があるという内部主体の様子とも一致している。ただ、白尾の記述では『麗藩名勝考』では現在の端陵古墳での事となっているのに対して、『神代三陵取調書』では中陵古墳での事となっており、名前だけでなく内容まで移っている。これはどうした背景があるのであろうか。考



周辺の古墳関係遺跡

古学的には名称の変化はどうということはないにしても、その内容がはっきりしないのは残念なことといわねばならない。墳丘規模や、安養寺丘古墳での石室状況などを考えるとどちらであってもおかしくない。今後、発掘調査でもできればその時に答は出るだろう。

現在、新田神社の宝物殿には直径二十一・六センチメートルの三角縁神獣鏡がある。出土地は定かでないが、一部破損した跡もあり、出土品のようである。あるいは、このふたつの陵のどちらかで出た鏡かもしれない。

四、さいごに

以上、白尾国柱の記した考古学関係の文書について紹介し、その関連史料についても紹介してきた。これら以外にもあるいはメモ程度の文書はあったかもしれない。しかし、今は見出せないでいる。

江戸時代における薩摩の考古学的記述については『新納久仰雑譜』(文化～安政年間)[注25]、『大崎名勝誌』(文政七年)[注26]などにも若干触れた部分があるが、このようなまとまったものは白尾の著作以外にない。

氏の調査および報告は、たびたび記してきたように微に入り細をうがつごとく、多くの書物を資料とした研究がされており、このことによってまた、当時の薩摩国学の程度も知れるのである。そして、考古学に関する関心度も高かったようで、畿内各地の古墳調査も実施している。とともに、『麑藩名勝考』で「本荘の叢塚たるや、馬跑牛眠の佳域にあらず。ついに田夫芻蕘のために発せられて、再び掩修するものなく、九原再び作らず、誰の遺陵とかせん。これまた悵然すべし。」と嘆いているように、古墳の保護・保存という面にも関心をもっていたことがうかがえる。

山陵比定についても、のちの後醍院真柱、樺山資雄らが勤皇思想の強さのみで文献をこじつけ、比定したのに対し、白尾の比定は考古学的な面をも加味した学術的見地での面がみられる。伝承についての面でやや混乱がみられるものの、氏が記した伝承はその内容を今後再吟味するうえで基本的図書となるに違いない。

これまで余りかえりみられることのなかった白尾の業績の一端を紹介してきたが、これを機にこうした人々の業績が再び日の目を見ることを念じ、稿を閉じたい。

(昭和六十三年一月三十一日稿了)

注1、清野謙次『日本人種論変遷史』小山書店　一九四四年二月　四八六ページ
注2、宮崎県内務部の出した『宮崎縣史蹟調査』第五輯(一九二八年一月)東諸縣郡之部にも「薩藩の考古学者　白尾国柱」と表現してある(十一ページ)。
注3、松原山南林寺は明治二年(一八六九)の廃仏毀釈によってとりつぶされ、翌年松原神社が建てられた。大正八年(一九一九)には墓地も廃止となり、今

は南州寺（鹿児島市南林寺町）の隣接地に少数の墓が由緒墓として残っているのみである。この中に白尾国柱の墓は見当たらず、確認したわけではないが、出生地からして多くの骨が移されたという草牟田墓地へ改葬されたのではなかろうか。

注4、この項については鹿児島史談会『神代三山陵』（一九三五年十一月）の「著書略伝」（一二一ページ）、白尾国柱『倭文麻環』上巻　青史社（一九七四年四月）の村田熙「解説・倭文麻環について」（五・六ページ）、渡邊正『薩摩の国学』黙遙社（一九八六年十一月）の「白尾国柱」（六・七ページ）などを参考にした。

注5、注2の11ページに鳥居が知事に提出した報告書（一九一四年）から抜書してある。

注6、石川恒太郎『宮崎県の考古学』（『郷土考古学叢書』4）吉川弘文館　一九六八年四月　二八四ページ

注7、斎藤忠「学史から見た宮崎県考古学の側面」『宮崎県史研究』創刊号　一九八七年三月

注8、この資料の存在については当館の池田光代さんの教示を得て、さらにその解読については堂満幸子さんに協力をいただいた。

注9、解読については忠実に記したが、一部はわかりやすく現代の漢字や仮名に書き改めたほか、読みやすく表現を変えた所もある。

注10、原口虎雄は『倭文麻環』下之巻（一九七四年六月）の解題で次のように書かれている。『挿画がまた貴重なもので、三国名勝図会や成形図説などの挿画とともに、当時の風俗を知るためには数少ない薩藩史料の一つである。専門の日本画家にいわせると、前二者の画よりも遙かにのびのびと、かつまた力強い筆致で、描写が活きているそうである。筆者は初めのうちは白尾氏の自筆だとは思っていなかったが、「ほねなきみゝずのみずかきの画に、これぞとなしぬるもかれにては力なき人まねに書誤りなどして……」と述べているところを見ると、まずは白尾氏の染筆とみてよかろう。』

注11、これは旧南葵文庫にあって、現在は東京大学図書館にあるものを参考にした。斎藤忠氏の御好意で、その写しを見せていただき、その解読には池田光代さんの協力を得た。

注12、この図はその後、矢野一貞『筑後将士軍談』や、黒川真頼『日本古代甲冑説』などにも紹介されている。

注13、鉄製品等は腐食してしまったであろうが、鏡・玉等は残っているはずと思い、玉里島津家資料の中を調査したが残っていない。磯の尚古集成館にもないという。

注14、斎藤忠『日本考古学史』（『日本歴史叢書』34）吉川弘文館　一九七四年八月

注15、中村明蔵「日向三山陵の設定について―古代における服属関係の成立（Ⅱ）」『隼人文化』第9号　一九八一年七月

注16、鹿児島史談会『神代三山陵』一九三五年十一月　を主として参考にしたが、県立図書館蔵の写本にも目を通した。この写本を見るにあたっては、県史料編さん室の井上明文氏にお世話になった。

注17、この項は、鹿児島県維新史料編さん所『鹿児島県史料　薩藩名勝考』一九八二年二月　を参考とした。

注18、注16と同じ

注19、注1と同じ

注20、鹿児島史談会『神代三山陵』一九三五年　十一月

注21、橋口兼柄『三国名勝図会』上巻　南日本出版文化協会　一九六六年二月　を参考とした。

注22、注20と同じ

注23、鹿児島県立川内中学校『川内地方を中心とせる郷土史と伝説』一九三六年五月では、「川内地方に於ける古墳」の項目の中で、若宮古墳、横岡古墳、宮里古墳（安養寺丘古墳）、平島古墳（御釣場古墳）とともに端陵が紹介されている。「四、端陵（新田神社の西方約三町神亀山の亀の頭部に当る所）　1、墳丘　亀の頭に当る小丘を利用して丘は西南十五間巾十間高さ十間位、上段の高さ約七尺が盛土である。（一種の円墳）現今丘上に小社を建て神鏡一面を安置し石柵を巡してある。　2、石棺　石柵の東北隅に一つの石棺の蓋だけが現われている。その蓋が何枚かの偏平な石を中央が高くなる様、甲の様に積

重ねてある所から鳥居博士は甲式石棺と云われた。（石棺全部を見る事が出来ぬため明瞭でない）組合式の箱形石棺中最も古いものであろう。当陵は瓊々杵尊の后、木花咲耶姫を葬られた御陵だという。地方人は特に御前様の御陵とも呼んでいるが、とにかく高貴な方のに相違ない。」

上村俊雄氏は『隼人の考古学』（『考古学ライブラリー』30）ニューサイエンス社　一九八四年十二月の地名表で、端陵を「地下式板石積石室墓および類似構造墳墓一覧」の中にいれている。

注24、測量は翌二十日、さらに十一月十七日までかかった。参加者は、中島哲郎・長谷川順一（以上、川内市歴史資料館）、南忠幸（川内市教育委員会社会教育課）、中村和美（別府大学学生）、堀之内弘道・徳守勝一（以上、川内市在住）の諸氏と当館の松山友子さん、筆者である。この測量調査については種子田敬宮司をはじめとする新田神社の方々、川内市歴史資料館、川内市社会教育課の協力を得、西健一郎氏（九州大学）にはいろいろと御教示いただいた。

注25、大口市春村遺跡（地下式板石積石室と地下式横穴がある）や、垂水市柊原貝塚などについての記述がある。

注26、大崎町横瀬古墳についての記述がある。

さいごに、この稿を書くにあたり多くの人々の協力を得た。それらの人々については注などで触れたが、ここに厚くお礼を申し上げたい。特に本文の主要部をなす古文書解読については、当館の堂満幸子さんと池田光代さんに校閲していただいたことを明記し、深謝する次第である。

〔補記〕

太田諒一氏の「橘三喜諸国一宮巡詣の旅」（『平戸史談』第十号　一九八二年四月）によると、平戸神楽の創案者である橘三喜は延宝三年（一六七五）に九州を巡詣している。この旅日記は享保年間に磯波翁藤正利が抜すいしてまとめたものだという。それによると十月十四日に新田八幡宮と三陵を詣でている。抜すいのまた抜すいであるために詳細は不明だが、次のように書かれている。『此に可愛陵と云は、瓊々杵尊を葬り、中の陵は出見尊、端の陵は葺不合尊ならんとおぼしく、丘のごとく三の小山、所を隔て石を畳み、井垣しまはし、何れもほこらたてり。中にも高の山の社、うしろは古木茂り、前には円形の小池あり、山の内榊多し。』

すなわち、この江戸時代前期には今の川合陵を可愛陵、端陵を中の陵、中陵を端の陵と呼んでいたようである。そして、すでにこの頃、ほこらを建て、井垣があったと記してあることから考えれば、ほぼ現状に近い状況だったことが想定できる。

本書の存在については長谷川順一氏の教示を得た。